

第二章 薫の物語 秋、八の宮死去す

[第一段 秋、薫、中納言に昇進し、宇治を訪問]

*宰相中将、その秋、中納言になりたまひぬ(宰相中将の薫君はこの年の秋に中納言にお成りなさいました)。 *遂にこの文にたどり着いた。遂に、というのは、この薫君の中納言昇進記事が竹河卷五章一段の「左大臣亡せたまひて、右は左に、藤大納言、左大将かけたまへる右大臣になりたまふ。次々の人びとなり上がりて、この薫中将は中納言に、三位の君は宰相になりて、喜びしたまへる人びと、この御族より他に人なきころほひになむありける。」に符合するものとして、年立てや巻序を知る重要な一文だという認識に基づいて、特に薫君の年立てについて注意しながら、橋姫巻以降を読み進んできたからだ。そして、今現在が薫君 23 歳の秋だと、ほぼ確認できた。ほぼ、というのは本文に現在年齢の明示が無いので、物語経緯からの推測にならざるを得ず、前は 1 年、後は 1~2 年の範囲での誤差は有り得るものの、今現在を 23 歳と仮定しても、全体の構成は破綻しないらしい、と見通せる、という意味だ。尤も、竹河巻の前掲記事は、他の巻に於いては源殿が右大臣のまま、藤殿が大納言のまま、であるらしく、「右は左に、藤大納言、左大将かけたまへる右大臣になりたまふ」と符合しない、という困った問題はあるらしいが、全体構成上で核心の薫君の年齢と役職について、ほぼではあるが、信頼にたる仮定が得られるのは、相当に読み違いを回避できる可能性が高まった。で、となると、それにつけても、改めて紅梅巻の巻序が目障りだが、この問題は紅梅巻にノートする。

いとど*匂ひまさりたまふ(ますます威光を放ちなさいます)。 *「にほひ」は<勢い、映え、威光、気品>などの力強さを意う語らしいが、この人の場合は<香り高さ>を思わせる語用でもありそうだ。

世のいとなみに添へても(公務が多忙になるにつけても)、思ふこと多かり(出生事情に思い悩みなさる事が多かったのです)。いかなることと(子細が分からず、実際にはどういう事があったのかと)、いぶせく思ひわたりし年ごろよりも(疑問に思い続けてきた今までよりも)、心苦しうて過ぎたまひにけむいにしへぎまの思ひやらるるに(弁の君から父親が故衛門督だと知らされてからは、その真相の重さに心苦しくて、亡くなった父君の在りし日の執心罪業が思い遣られて)、*罪軽くなりたまふばかり(罪滅ぼしなされるように)、*行ひもせまほしくなむ(勤行をしたいとお思いになるのです)。 *「罪軽くなりたまふ」の主語は、薫君自身か、故父君か、分からない。 *「行ひもせまほしくなむ」は下に<思す>などが省かれている。

かの老人をばあはれなるものに思ひおきて(薫君は弁の君を奇特な者と考へて)、いちじるきさまならず(しかし親しさを変に勘繰られるのも不都合なので、目立たないように)、とかく紛らはしつつ(何かと紛らわせながら)、心寄せ訪らひたまふ(気遣って見舞品を贈りなさいます)。

宇治に参うでで久しうなりにけるを(宇治に参らずに久しくなっていたのを)、思ひ出でて参りたまへり(思い出して薫君は八宮邸に参上なさいました)。*七月ばかりになり(もう初秋の七月にもなっていました)。 *「しちぐわちばかりに」の「ばかりに」の語感だが、これは「久しうなりにける」を受けているので、時の経つのが早く<もうそんな時分にも>という言い方に聞こえる。注にも<春の二月二十日ころに初瀬詣での匂宮を迎えに宇治に行って以来の訪問。>とある。また、初秋とは言え七月では残暑厳しい折で、その季節感が以下に語られる。

都にはまだ入りたたぬ秋のけしきを(都にはまだ訪れない秋の気配を)、*音羽の山近く、風の音もいと冷やかに(音羽山近くの風の音もとても冷ややかで)、*槇の山辺もわづかに色づきて(槇の山肌もわづかに色付いて)、なほ尋ね来たるに(やはり山里に訪ね来ると)、をかしうめづらしうおぼゆるを(風情が濃いと薫君は感じ入るが)、宮はまいて(八宮は薫君以上に再会を喜び)、例よりも待ち喜びきこえたまひて(いつもよりも歓待ぶりを示し申しなさって)、このたびは、心細げなる物語(この度は心細く思う姫君たちの行く末に付いて)、いと多く申したまふ。(とても多くお話し申しなさいます) *「おとはのやま」は注に<『花鳥余情』は「松虫の初声誘ふ秋風は音羽山より吹きそめにけり」(後撰集秋上、二五一、読人しらず)を指摘。>とある。「音羽山」は大辞林に<京都市山科区、滋賀県との境にある山。北は逢坂山に接し、南は醍醐山に続く。ホトトギスの名所。海拔 593m。(歌枕)>とある。宇治よりはずっと大津寄りの山科から伏見方面の山だが、都から見れば同じ秋の風向きなのだろうか。 *「槇の山辺」は橋姫巻三章七段に「あさぼらけ家路も見えず尋ね来し槇の尾山は霧こめてけり」(和歌 45-08)と薫君の姉姫への贈歌にも詠まれていた山のことらしく、その注に<「槇の尾山」は宇治川右岸にある山、歌枕。>とあった。

「亡からむ後(私の死後は)、この君たちを(この娘御たちを)、さるべきもののたよりもとぶらひ(季節の折節にも御見舞下さって)、思ひ捨てぬものに数まへたまへ(何とぞお忘れ下さいますな)」

など(などと八宮は)、おもむけつつ聞こえたまへば(薫君に婚意を打診しながらご相談申しなさると)、

「*一言にても承りおきてしかば(一言でも承って置きました以上は)、さらに思うたまへおこたるまじくなむ(決して疎かには致しません)。 *「ひとことにても」は、去年の十月に訪れた際にも薫君は同じような言い方で、「一言もかくうち出で聞こえさせてむさまを違へはべるまじくなむ」(橋姫巻四章二段)と言っていた。切実だから、八宮はくどくなるのだろう。が、零落した家が世間と上手く折合いをつけて世渡りするのは、いろいろな意味で難しそうだ。

世の中に心をとどめじと(出家を旨に、現世に執着しないように)、はぶきはべる身にて(妻子を儲けない身ですので)、何ごとも頼もしげなき生ひ先の少なさになむはべれど(何ごとも頼られ甲斐の無い将来性の少ない私ですが)、さる方にてても*めぐらひはべらむ限りは(そんな風でも生きております限りは)、変らぬ心ざしを御覧じ知らせむとなむ思うたまふる(変わらぬ誠意をお示し申したいと存じます) *「めぐらひ」は「廻らふ(現世に生きる)」の連用形「めぐらひ」のイ音便だろうか。注には「めぐらひはべらむ限りは」が<自分がこの世に生きております限りは、の意。>とある。

など聞こえたまへば(などと薫君が申しなさって)、うれしと思いたり(八宮は嬉しくお思いになりました)。

[第二段 薫、八の宮と昔語りをする]

*夜深き月の明らかにさし出でて(深夜の月が明るく差し出て)、山の端近き心地するに(山の稜線が大きく見える中で)、念誦いとあはれにしたまひて(念仏をじっくりと心を込めて上げなさってから)、昔物語したまふ(八宮は昔話をなさいます)。 *「夜深き月の明らかにさし出でて」いるのは、だいたい16夜~18夜くらい。つまり旧暦7月の15日~17日の間の何日かの話。

「このころの世は、いかななりにたらむ(近頃の都はどんな感じなんでしょうか)。*宮中などにて(かつて御所などで)、かやうなる秋の月に(このような秋の月夜に)、御前の御遊びの折にさぶらひあひたる中に(帝の御前での楽器演奏の時に伺候し合った人たちの中で)、ものの上手とおぼしき限り(名手と思われる者ばかりが)、とりどりにうち合はせたる拍子など(それぞれ得意な楽器でその場で打ち合わせて合奏した演奏などは)、ことことしきよりも(事改まった式典演奏よりも)、よしありと*おぼえある(風情があった気がします)。 *「宮中」は「くちゅう」と読みがあるが、意味は<御所>で良いらしい。注には<『集成』は「見馴れない言葉であるが、仏者としての八の宮の特殊な用語なのであろう。「宮(く)」は呉音」と注す。「宮内庁(くないちょう)」など。>とある。ところで、此処の文は「昔物語」と前振りされていて、八宮の昔の宮中生活の実体験から来る感想が語られているので、述懐の副詞「かつて」を補語して置く。 *「おぼえある」は近い仲での話し言葉なので、下に<ものなりし>などの堅苦しい言い方が省かれている、のだろう。

女御、更衣の*御局々の(女御や更衣の御部屋様方勢の女房たちが)、おのがじしは挑ましく思ひ(各自こそはと競い合つて)、うはべの情けを交はすべかめるに(日頃は表面上は親切そうに社交するものでしょうに)、夜深きほどの人の気しめりぬるに(深夜の人氣が静まった頃に)、心やましく搔い調べ(満たされぬ思いに搔き鳴らす曲の)、ほのかにほころび出でたる物の音など(仄かに洩れ聞こえる琴の音なども)、聞き所あるが多かりしかな(聞き所のあるものが多かったものです)。 *「おおんつぼねつぼね」は御部屋様御自身ではなく、その<各御部屋体制(の女房・女官たち)>の意なのだろう。

*何ごとにも、女は(とにかく女は)、*もてあそびのつまに*しつべく(男が疲れを癒す片割れにしようとするので)、ものはかなきものから(頼りない存在ながら)、人の心を動かす*くさはひになむあるべき(男の気持ちをくすぐる楽しみになってしまうものだ)。 *「何ごとにも女は」は注に<『集成』は「何ごとにつけても、女というものは、なぐさみのきっかけになるもので。「もてあそび」は、愛玩の対象。後宮の女性についての思い出話から、一般論に転ずる」と注す。>とある。「一般論に転ずる」のは、其を以て姫君たちの身の振分け方に付いての判断基準に資する、という思考意図だ。 *「もてあそび」は<気晴らしの慰め>でもあり<憂さ晴らしの救い>でもあり<元気の素の楽しみ>でもある。「つま」は<相手>だが、一方的な認識ではなく、互いに補完しあう<片割れ>という認識の語用なのだろう。日本語の「つま」は古来から、男女の別なく<信頼する愛人>を意味していて、父権社会構造からなる外来文化から「パートナー」などというワザとらしい造語を取り込もうとする被害妄想の精神状態から抜け出す算段を探る意味からも、この「つま」を無造作に<相手>と考えるのは要注意だ。で、「もてあそびのつま」は<遊び相手、気晴らし相手>と言うより<(社会生活上での)疲れを癒す(互いに→此処では男にとっての)片割れ>と見て置こうかと思う。 *「しつべし(しようとする)」と判断するのは、此処の文意では<男>であり、この連用形の「べく」は修辭の副詞語用ではなく、条件項を示す。 *「くさはひ」は<種、原因、素材>また<種類、品々>また<趣き、おもしろみ>とある。つまり、ネタだ。

されば、罪の深きにやあらむ(それが女の罪深さなのでしょうか)。子の道の闇を思ひやるにも(子供の教育方針に迷う時にも)、男は(男の子は本人次第なので)、いとしも親の心を乱さずやあらむ(然程親の心を惑わしません)、女は、限りありて(女は男次第なので)、いふかひなき方に思ひ捨つべきにも(取柄が無いと諦めるような子でも)、なほ、いと心苦しかるべき(何とかならないかと親は苦心します)」

など(などと子育てについて)、おほかたのことにつけて*のたまへる(世間一般の女の事情として仰るのを)、「*いかがさ思さざらむ(どんなにか姫をそのように劣るなどとはお思いでないことか)」、心苦しく思ひやらるる御心のうちなり(と薫君には心苦しく思い遣られる八宮の御心中なのでした)。*「のたまへる」は連体形なので<仰る八宮。>と言っていることになり、此処で文末とすると、余韻を持たせる打ち切りか、特別な拍子を意図した言い回しか、になりそうだが、此処ではそのような文意を受け取る事が出来ず、「を」などの格助詞ないし接続助詞で下につなげないと文が収まらない。*「いかがさ思さざらむ」は薫君の内心文らしい。注に<『一葉抄』は「草子詞」と指摘。『集成』は「いかにもそうおぼしめすに違いないことだ。地の文であるが、以下、聞いている薫の心中」。薫の心中を挿入句で挟み込む。>とある。「さ」は「いふかひなき方に思ひ捨つべき」を受ける。

「*すべて、まことに、しか思うたまへ(全く本当に御説ご尤もで)。捨てたるけにやはべらむ(忘れていたのかもしれませんが)、みづからのことにては(私自身のこととしては)、*いかにもいかにも深く思ひ知る方のはべらぬを(どうにもこうにも深く思い知る親の躰けには心当たりがないものの)、げにはかなきことなれど(本当につまらないことですが)、声にめづる心こそ(音曲に感じ入る心は)、背きがたきことにはべりけれ(親の言い付けに背き難いところです)。*「すべてまことに」は、今の話し言葉で言えば<いやもう全く確かに>という追従だろう。で、「しか思うたまへ」は<実にその通り>みたいな言い方で、「思うたまへ」は連用形ではなく、未然形の「たまへ(む)」の「む」落ちの定型句と見做せば、此処で句点を置くべきかも知れない。現代語でも「御説ご尤もで(す)」は、よく「す」落ちする。と、さて、当文に於いて、これらの解釈はあまりにも諸訳文と違うので、何かとんでもない錯誤を犯しているのかも知れないが、私としては冗談などを言う心算はなく、本気で斯様に読む。それと恐らく、話題は八宮の御説を受けての、子育てや親のしつけ、なのだろう。*「いかにもいかにも」は如何にも冗句口調。「深く思ひ知る方のはべらぬを」が「背きがたきことにはべりけれ」に結ぶという戯れ。ただ、微妙な出生事情を抱える薫君にしてみれば、「いかにもいかにも深く思ひ知る方のはべらぬを」は皮肉っぽい自虐ネタの趣もある。滑稽譚こそ芸の真髄、というのは本当かも知れない。たった一言の洒落を言うために、百万語を積み上げるなんて、ヒトじゃなきゃ出来ないし、やらない。いや、たった一言の洒落で世界が変わり、未来が開けるからこそ、百万語が積み上がってしまった後には必ず、ヒトは絶対に洒落を言わずには居られない、のかも知れない。

さかしう聖だつ*迦葉も(賢人で聖人の迦葉も)、さればや(その音楽好きの所為で)、立ちて舞ひはべりけむ(仏前で立って踊ったって言うんですから) *「迦葉」は「かせう・かしょう」と読みがある。インド人の名前だから、漢字は当て字なのだろう。先ず読めない。注には<『完訳』は「釈迦の十大弟子の一人。頭陀(乞食修行)の第一人者といわれた。香山大樹緊那羅が仏前で瑠璃琴を弾き、八万四千音楽を奏した時、迦葉が威儀を忘れ、起って舞ったという(大樹緊那羅経)」と注す。>とある。この注が無ければ文意が全く分からないところだ。大賢人らしいが、私は全く知らない。

など聞こえて(などと薫君は応え申して)、飽かず一声聞きし御琴の音を(ほんの少しだけ聞いたことがある姫君の御琴の音を)、切にゆかしがりたまへば(どうしてももう一度聞きたいと切望なさったので)、うとうとしからぬ初めにもとや思すらむ(源中納言と姫が親しくなる良い機会だともお思いになったか)、御みづからあなたに入りたまひて(御自身で姫の部屋にお入りなさって)、切にそそのかしきこえたまふ(しきりに弾奏を促し申し上げなさいます)。

箏の琴をぞ、いとほのかに掻きならしてやみたまひぬる(姫君は十三弦琴をごく控え目に爪弾きしただけでいらっしやいました)。いとど人のけはひも絶えて(すっかり人気も絶えた深夜の)、あはれなる空のけしき(秋の風情が漂う空の月の表情に)、所のさまに(場所柄からか)、わざとなき御遊びの心に入りてをかしうおぼゆれど(さりげない姫の演奏が胸に沁みて情緒があったが)、うちとけてもいかでかは*弾き合はせたまはむ(宮が修行暮らしをなさっているこの山荘で、どうして薫君が風流ぶって姫君と弾き合わせなさる事があるものでしょうか)。 *「弾き合はせたまはむ」の主語は薫君なのだろう。「御遊びの心に入りてをかしうおぼゆ」が薫君目線の語りなのだから。

「おのづからかばかりならしそめつる残りは(私が此処まで引き合わせた後は)、*世籠もれるどちに譲りきこえてむ(若い者同士に任せよう)」 *「世籠もる」はくまだ家に籠もって世間を知らないでいる→若くて将来がある>という言い方らしい。が、中納言も姫君たちも、とてもさほどは若い年齢とは思えず、特に中納言は中納言という世慣れた地位にあるし、さんざん女遊びをして来ていて、この山荘でこそ世離れに向かう姿勢を見せ、また実際に、弁の君に出生を秘密を知らされて、とても浮ついた気分には成れないようだが、この人の厭世気分の上半身と女好きの下半身との二面性は既に、匂宮巻二章五段に説得力のある現実的な説明で語られていた。誰にだって個別事情は当然に有るワケで、それが世間一般という社会性を意識し始める思春期には、自分が社会に受け入れられる存在かどうか不安を覚え、自問を繰返すという内向性思考に繋がるから、健康で有能な若者がいくら自身に備わった性衝動で活発に動き回っても、どこかで落ち込む、というのは、むしろ誰にでもある普通の姿だ。確かに、薫君のような混み入った出生事情は特別かも知れないが、それだって誰にでもある個別事情のひとつなのだから、すべては考え次第だし、現に、薫君ほど女にも財にも恵まれた境遇など滅多になく、普通に思えば、そっちの方がよほど尊い。

とて、宮は仏の御前に入りたまひぬ(と考えると八宮は、勤行のために仏間に入ってしまわれました)。

「われなくて草の庵は荒れぬとも、このひとことはかれじとぞ思ふ (和歌 46-05)

「一琴に 思い残して 草は枯れ (意識 46-05)

*注に<以下「多くもなりぬるかな」まで、八宮から薫への贈歌。「一言」と「一琴」、「枯れ」と「離れ」の掛詞。「草」と「枯れ」は縁語。>とある。

かかる対面もこのたびや限りならむと(こうしてお会いするのも今回限りかと)、もの心細きに忍びかねて(余命少ない心細さに抑え切れず)、かたくなしきひが言多くもなりぬるかな(愚かしい世情未練の愚痴が多くもなっていました)」

とて、うち泣きたまふ(とって八宮はお泣きなさいませう)。

客人(まらうと)、

「いかならむ世にか枯れせむ、長き世の契りむすべる草の庵は (和歌 46-06)

「一言の 結ぶ契りに 枯れぬ草 (意識 46-06)

*注に＜薫の返歌。「草の庵」「かれ」の語句を用いて返す。「草」と「結ぶ」は縁語。＞とある。

*相撲など、公事ども紛れはべるころ過ぎて、さぶらはむ(相撲などの公行事で忙しい時期が過ぎたら、また伺います)」 *「すまひ」は注に＜以下「過ぎてさぶらはむ」まで、薫の詞。相撲の節会は七月下旬。＞とある。間近なのだろう。

など聞こえたまふ(などとお応え申しなさいませう)。

[第三段 薫、弁の君から昔語りを聞き、帰京]

*こなたにて(薫君はその南廂に)、かの問はず語りの古人召し出でて(かの問わず語りの老女を呼び出しなさって)、*残り多かる物語などせさせたまふ(聞き残している事が多い八宮の若い頃の話などをさせなさいませう)。 *「こなた」が何処なのか明示は無い。が、寝殿に迎えた客なら、普通は南表の庭に面した廂の間に招き入れるのだろう。で、多分、それも西側の妻戸近くだ。昨秋の山荘訪問時に「御供の人は西の廊に呼び据ゑて」(橋姫巻二章三段)とあったので、玄関が西の中門にあったらしいと知れるからだ。 *「残り多かる物語」とは何か。勿論、薫君は弁の君に聞き残している事は多くある。故衛門督の様子などは、この人以外に直接関わった話を聞ける人はいない。尤も、母君の三条宮も当然に直接関わった人だが、聞ける立場ではない。それはそれとしても、ところで、この場は奥まった山荘とは言え密室ではない。故藤原君の話は、昔話の折にそれとなしには聞けるだろうが、あまり熱心に聞いたのでは、話題が偏りすぎて余人に異変を疑われかねない。となると、この場で薫君が弁の君に聞きたいのは、自分の事情ではなく、八宮の事情の方なのだろう。昨冬の訪問時に弁は「この宮は父方につけて童より参り通ふゆゑはべりしかば」(橋姫巻四章四段)と語っていたので、八宮の若い頃のこと、そして多分、失脚に至る事の顛末も、故夫人のことも、姫君たちの出生時の様子も知っていて、ちょうど薫君が生まれる直前までの宮処の様子を、六条院の女房たちとは別の視点で語り聞かせてくれる、という、非常に貴重な得難い人物ではあったようだ。

入り方の月、隈なくさし入りて(入り方の月が部屋の隅々にまで差し入って)、*透影なまめかしきに(薫君の御姿が御簾越しに艶に見えて)、君たちも奥まりておはす(姫君たちも奥の母屋にいらっしゃるのでした)。 *「すきかげ」は注に＜御簾越しに見える薫の優美な姿。＞とある。

世の常の懸想びてはあらず(世の常の懸想めいた男のようではなしに)、心深う物語のどやかに聞こえつつものしたまへば(薫君は弁の君としみじみと父宮の様子などを話し込んでいらっしゃったので)、*さるべき御いらへなど聞こえたまふ(姫君も時折に事実確認の御回答などを申しなさいませう)。 *「さるべき御いらへ」は＜事実確認または事実関係の確認回答＞あたりだろう。

「三の宮、いとゆかしう思いたるものを(三の宮がこの姫君たちをととても興味深く思っているが)」と、*心のうちには思ひ出でつつ(と薫中納言は内心では思い出して)、「わが心ながら、なほ人には異なりかし(我ながらやはり少し変だろうか)。さばかり御心もて許いたまふことの(これほどに父君の八宮が私に姫君をお許し下さっていると言うのに)、さしもいそがれぬよ(どうもその気にならないとは)。 *「心のうちには」は、これほどに無常感いっぱい山荘場面でありながらも、薫君はふと、自分の男心に気付く、という話の展開を示す、少し皮肉っぽいものの言い方、に聞こえる。

もて離れて(しかし私と姫との結婚が以ての外の)、はたあるまじきこととは(決してあってはならないことだとは)、*さすがにおぼえず(いくら無常の世とは言うものの、それだけに無常の世のこととすれば、あってもいいわけだ)。*「さすがに」は、此处では<無常感ながらも>。

かやうにてもものをも聞こえ交はし(このように言葉を交わし)、折ふしの花紅葉につけて、あはれをも情けをも通はすに(季節の折節の花や紅葉を見て風情を感じ合うのに)、憎からずものしたまふあたりなれば(憎からずいらっしゃる姫君たちなれば)、宿世異にて(縁が無いといって)、他ざまにもなりたまはむは(他の男と結婚なさるといのは)、さすがに口惜しかるべう(さすがに惜しまれるとのように)、*領じたる心地しけり(薫君は姫君を自分のもののように思うのでした)。*「領ず(りゅうず)」は<所有する、支配する>。確かに薫君は、この八宮邸に相当な援助をして来てはいる、のかも知れない。というか、よくも三年間も放って置いたもんだとさえ思う。20歳くらいの女の三年間は、どうなんだろう、傍目でも勿体無い気がする。

まだ夜深きほどに帰りたまひぬ(まだ夜の暗い内に薫中納言はお帰りになります)。心細く残りなげに思いたりし御けしきを(心細く余命少なげにお思いのような八宮の御様子を)、思ひ出できこえたまひつつ(思い出し申しなさりつつ)、「騒がしきほど過ぐして参うでむ(閑になったらまた参上しよう)」と思す(と薫君はお思いになります)。

兵部卿宮も(匂兵部卿宮も)、この秋のほどに紅葉見におはしまさむと(この秋の内に宇治に紅葉を見に出かけなさろうと)、さるべきついでを思しめぐらす(適当な機会を思いめぐらさいます)。御文は、絶えずたてまつりたまふ(妹姫へのお手紙は絶えず差し上げなさいます)。*女は、まめやかに思すらむとも思ひたまはねば(妹姫は三の宮のお手紙を本気の女への恋文とも思いなさらなかったの)、わづらはしくもあらで(本気で悩みもせず)、はかなきさまにもてなしつつ(社交訓練の心算で、風流遊びの相手を務めつつ)、折々に聞こえ交はしたまふ(その都度お返事申し上げなさいます)。*「をんなは」は注に<『完訳』は「匂宮の贈答の相手、中の君。男女関係を強調した呼称に注意」と注す。>とある。しかし姫は「まめやかに思すらむとも思ひたまはねば」とあるので、是は匂宮の意識を示して居るのだろうか。しかし、この文の主語は姫君であり、匂宮目線の文ではない。それに、姫は結局は「折々に聞こえ交はしたまふ」のだから、予防線は張りつつも、匂宮から「女」として見られることを期待している、という微妙な女心を示しているのかも知れない。尤も、女心は微妙なのが普通だろうが、それにしても、やはり作者の意図は良く分からない「女」の語用ではある。

[第四段 八の宮、姫君たちに訓戒して山に入る]

秋深くなりゆくまに(秋が深まるにつれて)、*宮は、いみじう*もの心細くおぼえたまひければ(八宮は非常に余命少なを心細くお感じなされたので)、「*例の(少し早めだが、恒例の季節の修行を)、静かなる所にて(静かな山寺で)、念仏をも紛れなうせむ(念仏行に専心したい)」と思して(とお思いになって)、君たちにも*さるべきこと聞こえたまふ(姫君たちにも言い残して置くべきことを聞かせ申しなさいます)。*「宮は」は注に<八宮。>とある。確かに、匂宮の話題に続いて「宮」とだけあったのでは、非常に紛らわしい。ただ、この作者にしてみれば、本来なら文意からして省いても良さそうな所を、紛らわしいから「宮は」と明示した、という心算なのかも知れない。*「もの心細し」は文脈から見れば、此处では<何となく心細い>のではなく<余命少なが心細い>のだろう。そう読まないで、ひどくあやふやな文にな

ってしまう。*「例の静かなる所にて」は注に<阿闍梨のいる山寺。『集成』は「例年のように、もの静かな阿闍梨の山寺で」。『完訳』は「例のごとく静かな山寺で」と訳す。>とある。去年の秋の話に「秋の末つ方、四季にあててしたまふ御念仏を、この川面は網代の波もこのころはいとど耳かしかましく静かならぬをとて、かの阿闍梨の住む寺の堂に移ろひたまひて七日のほど行ひたまふ。」(橋姫巻三章一段)とあったので、この「例の」はくよくするようには>という一般語用ではなしに<例年通りの季節の念誦>かと思う。ただ、「もの心細くおぼえたまひければ」を受けるので、「秋深くなりゆくままに」は「秋の末つ方」にはまだ早い八月下旬あたりで<予定を早めた>という事情だった、と見て置きたい。*「さるべきこと」は注に<『完訳』は「最期の別れになるかもしれぬという予感から、言葉が遺言めく」と注す。>とある。従う。が、そうであれば、「もの心細し」は<何となく心細い>のではなく<天命を感じて心細い>に違いない。

「世のこととして(世の常として)、つひの別れを逃れぬわざなめれど(終の別れは避けられないものようだが)、*思ひ慰まむ方ありてこそ(後顧の憂いがなければ)、悲しさをも覚ますものなめれ(悲しさも薄れるものでしょうに)。また見譲る人もなく(他に任せる人もなく)、心細げなる御ありさまどもを(あなた方の頼りない御境遇を)、うち捨ててむがいみじきこと(そのままにして逝ってしまうのが心残りです)。*「思ひ慰まむ方ありてこそ〜」は注に<『集成』は「何か気持の安まるようなことでもあるのでしたら、(死別の)悲しみも薄らぐというものでしょう。後顧の憂いがないなら、自分もいささか心を安んじて死ぬるのだが、の意」と注す。>とある。是に続けて、姫君たちの行く末が案じられると言っているのだから、左様の文意に見える。ただ、「さます」は「覚ます」よりは<冷ます>だろうとは思うが。

されども(そうは言っても)、*さばかりのことに妨げられて(そうした現世事情に阻まれて)、*長き夜の闇にさへ惑はむが益なさを(極楽往生を逸しては、私に縁ある者を救うべくして行って来た修行の甲斐がない)。*「さばかりのこ」は注に<直前の「見譲る人もなく心細げなる御ありさまどもをうち捨ててむが」という、姫君たちの将来の不安をさす。>とある。従って是を<それだけのこと、それしきのこと、その程度のこと>と言ってしまうと、娘たちを突き放した非常に冷たいものの言い方になってしまうので、八宮の発言主旨とは少しズレしてしまう気がする。「さばかりのことに妨げらる」という言い方は、出家を旨としている者にとって<現世事情が修行を邪魔する→この世のしがらみが祈念の尊い精神集中を乱す>みたいな意味合いなのだろう。いや、だがしかし、ヒトが世代交代によって種を繋ぐべき存在である以上は、先ずは有機生命体として、その子が自生出来るようになるまで物理的に保護し摂食させる事は親の責務であり、同時に社会組織形成種として、子に社会性を持たせるように育むのは親自身の安堵でさえある。そうした親の立場は現世事情と言うよりは、個体に課せられた存在意義であり、それを全うすることは命を賭すべき価値のあるものに違いない。そして多くの場合、それを全うするのは決して楽ではなく、そのことだけに生活のほとんどを費やす。が、同時にそれが生き甲斐であり喜びでもある。ただし、これらは実際には、それこそ個体の個別事情に左右されて実相するわけで、その全てが幸福を保証されるものでもなく、子育てでの失敗もあれば、そも子を儲けることさえ与らない人もいる。また、子の居る居ないについても、思うところは人それぞれだ。とは言え、ヒトという種が、類として存在し得ている現状からすれば、個体の次世代への引継ぎ失敗は、結果として織込み済みの事情ではあるが、個体自身としては引継ぎの成否が重要な事案である事には変わりはないだろう。ついでながら、事物の理解に補助線を引くのは有効な工夫でもあり、その存在の真否は定かではないものの、自然の摂理に神仏の意向を仮定するのは、時に非常に分かり易い解説を提示出来て、其が故に圧倒的な影響力を与えかねないほどだが、人類の存在に神の意思が有るのか無いのかは別にして、個体の多様性は事実として尊重されているので、結婚するしない、子を設ける設けない、などの個人の生き方の違いには神仏の存在を無視しても何の問題もない、という事が、それらは個体事情に過ぎないということから逆説的に、立証されているとは言える。即ち、子育てに付いては、犯罪や信義という社会規範の問題とは異

なり、元々個人の多様な存在形態の事情として、絶対価値の外にある、正に個人の価値観に委ねられる事柄であり、それだけに親個人の社会性が非常に重要な意味を持つてくる、という次第。だから、この場に即しても、姫君たちには罪は無いが、八宮には相当に罪が有る、というのが、私の見方だが、仏道では、八宮が姫たちに執心しない事が尊いとされるようで、少し戸惑う。が、実は是等は相反していない。というのは、姫君たちは「姉君二十五、中の君二十三にぞなりたまひける」(一章四段)ということなので、八宮はいつまでも執心せずに、姫君たちをとっとと嫁がせて置くべきだったのだ。そうすれば、その後の姫たちの人生は姫たち自身が責任を負うので、とっくに八宮は責を免れていたわけだ。が、そこに没落貴族の悲哀があった、のではあろう。ともあれ、それらは確かに現世事情なのだが、それを客観的に現世事情といえるのは、当事者を離れた者か、当事者ながら裕福で実際の子供の世話を人任せに出来る身分の者、などに限られる。八宮は明らかに後者で、冷たい人ではないだろうが、恵まれた人ではある。だから、その悪気の無さを、言い換えても出来るだけ工夫したい。*「長き夜の闇に惑ふ」は注にく無明長夜の闇。現世に執着する煩悩のために真の悟りを得ず(極楽浄土に成仏することを得ず)、六道に輪廻することをいう。>とある。ということは、「益なし(やくなし)」は<修行の甲斐が無い>ということらしい。

*かつ見たてまつるほどだに*思ひ捨つる世を(現にあなた方を御育て申しながらできえも山間での隠棲暮らしだったものを)、去りなむうしろのこと、*知るべきことにはあらねど(死後までは、そのお暮らしぶりを見守れません)、わが身一つにあらず(私だけのことではなく)、過ぎたまひにし*御面伏せに(なくなった母君の御名誉のためにも)、*軽々しき心どもつかひたまふな(軽々しい考えはなさいませんように)。*「かつ」は同時性を示す副詞で<～しながら(も)>という言い方だろう。*「思ひ捨つる世」は<世捨ての人生＝山里での隠遁生活>。*「知る」は此処では「領る・治る」で<支配する、治める→管理する→見守る>くらいの語用らしい。*「おおんおもてぶせ」は<お顔汚し>。*「軽々しき心どもつかひたまふな」は具体的にはどういう事を制しているのだろうか。臣下身分の藤原氏に利用されるな、だろうか。それともむしろ、誠意の無い男と結婚して不幸になるな、だろうか。少しは政治を知っていそうな八宮自身できえ、相手を決めかねた姫の結婚に、どうして世間知らずの姫君たちが正しい判断が下せる、と思えるのか。いや、そうは思えないから、是は八宮の願望に過ぎない。が、言われた姫たちには重く押し掛かる言葉だ。所詮、結婚なんて子育て体制が内実なので、相手との相性を現在時点で判断して未来を託すことになるわけで、どうしたって賭けの要素は多く、若い身空を思えば、互いに大事に思い合える事を信じて決める以外はないのだから、結局は当事者本人を信頼できる子に育てたかどうかしか、親の頼り所は無い訳で、広い意味で段取りを付ける事の他は、口出しの仕様も無いものだ。それを、八宮は心配のあまり口出しする。修行が足りないんじゃないか。だがしかし、是が読者に非常に辛く響くのは、常陸宮女の末摘を話し聞かされているからかもしれない。いや、此処の端姫たちは末摘よりははるかに美人で気が利いていそうだが、没落貴族の悲哀には同じような救いの無さを感じる。

おぼろけのよすがならで(並々ならず信頼できる相手になければ)、人の言にうちなびき(その男の言葉に従って)、この山里をあくがれたまふな(この山里の屋敷を離れなざるな)。「おぼろけのよすが」は八宮と姫君たちとに於いては薫君のことと共通認識されていたように思うが、薫君自身が婚意を示していないので明言出来ない、みたいな事情だろうか。だとしたら、薫君も罪深い。が、それにしても、姫は二人居て、薫君一人では、一人はあぶれるが、順当に話が進めば、もう一人の相手は匂宮になりそうだが、みたいな現状だが、どうなのか。何と言うか、私がこの場に居たら、八宮の口を手で塞ぎたいような気になる。余計な事を言っただけ姫を苦しめるな。以前に、藤原家筋の縁者が姫の縁談を盛んに持って来ていたらしい記事があったが、別に、この山荘を藤原氏に乗っ取られたとしても、それはそれで良いじゃないか。帝位が今よりもはるかに小規模で手が届く位置に有ったからこそ、八宮の王家執心だったのかもしれないが、であれば、外部からの転覆も却って急がば回れ、という状況でもあったのではないか。いや、王家が国体を示していたことこそが核心だ、などというのも、今

の価値観からの懐古だろう。揺るぎ無いと思って居るのも、揺るが無い内のこと。変わってしまえば、そんな時代もあったね、で終わる。いや、王家が無意味だと言う心算はない。その文化も歴史も宗教性も十分に再認識されるべきとは思ふ。が、時代は変わる。それだけのことだ。いや、それならむしろ、八宮の死後は姫たち自身の手に掛かっているのだから、楽観的に考えれば、八宮が何を言っても、姫たち自身が思うように振舞えば良いわけで、八宮には言わせるだけ言わせておけ、ということになるか。しかし、やはり姫の判断能力は不安か。

ただ(良縁無くば、ただ)、かう人に違ひたる契り異なる身と思しなして(このような人とは違う運命の身と自分を見做して)、ここに世を尽くしてむと思ひとりたまへ(この山荘で一生を終えるものと観念して下さい)。ひたぶるに思ひなせば(邪念を払えば)、ことにもあらず過ぎぬる年月なりけり(一生は事も無く過ぎ去る年月なのです)。*此処で述べられる八宮の説は、折角の芽を摘む、かの無情な物言いのようでもあるが、平穩無事に日々を暮らす尊さの表現と取れば、それなりに実効性の有る教えにも聞こえる。

まして、女は、*さる方に絶え籠もりて(まして女は世間から一切断絶して引き籠もり)、いちしるくいとほしげなる(著しく不本意な)、よそのもどきを負はざらむなむよかるべき(悪評を立てられないのが良いでしょう)」などのたまふ(などと八宮は仰います)。*「さる方に絶え籠もりて」は<完全に引き籠もって>だろうが、普通はそんなことでは暮らしが成り立たない。しかし、引き籠もっていても暮らしが立つなら、何の発展性もない代わりに平穩な生活が保たれる、という非常に有効な安全策であり、それは家の根源的な機能の一つでもあって、一般論としても、個室の有る無しは誰にとっても重要事項だ。

ともかくも身のならむやうまでは(姫君たちは自分たちが、どのような身の上になってしまうかまでは)、思しも流されず(お考えも進まず)、ただ(偏に)、「いかにしてか(どうして)、後れたてまつりては(父宮に先立たれ申しては)、世に片時もながらふべき(この世に片時も生き永らえようか)」と思すに(とお思いになって)、かく心細きさまの*御あらましごとに(このように心細い父宮の遺言めいた御申し置きに)、言ふ方なき御心惑ひどもになむ(言いようもなく惑うお気持なのでした)。*「おおんあらましごと」は<御予見←御遺言>みたいな言い方、なのだろう。

心のうちにこそ思ひ捨てたまひつらめど(八宮は自身の考えとしては既に未練を絶っていらっしやったということのようでも)、明け暮れ御かたはらにならはいたまうて(日頃からお側に慣れ親しんでいらっしやっていたながら)、にはかに別れたまはむは(急にお別れなさるといのは)、つらき心ならねど(冷たい心からのことではないにしても)、げに恨めしかるべき御ありさまになむありける(姫君たちには実に悲しい御話し向きだったので)。

明日、入りたまはむとての日は(明日、山寺にお入りになるという日には)、例ならず(いつになく)、こなたかなた(山荘のあちこちを)、たたずみ歩きたまひて見たまふ(八宮は歩き回って御覧になります)。「明日」は「あす」と読みがある。「あした」は「朝」のことらしい。語感としては、「あ」は特に何かに意識を集中する接頭語で、この場合なら日付に注目する言い方で、「す」は一般に物事の進行を認識する語で、「あす」は<進む次の日=明日>、「あした」は<次に進んだ日=朝>、みたいなことだろうか。因みに、「あくるひ」は<次に来るであろう日=明日>あたりか。現代語では「朝」は「あさ」で、「明日」は「あした・あす」だが、「あす」と「あした」は現場の当事者にとっては自明のこととして共通認識される時刻の確認でも、客観的には「あした」が何時の「朝」なのか分かり難く、その「朝」の当日性を示す言い方として「さ(まさにその)」が多用されたのではないだろうか。

で、当日以外の「朝」を示す場合には、その「何時」を明示する語用となった、のではないか。左様に語用の客観性が工夫された、という考え方で日本語の推移を調べるのも有意義かも知れない。こんな思い付きに、これ以上の時間を費やす気は私には無いが。

いとものはかなく(ごく簡素で)、かりそめの宿りにて過ぐいたまひける御住まひのありさまを(一時的な住まいの心算で過ごしていらっしゃった御邸内の様子を)、「亡からむのち(私の死後は)、いかにしてかは、若き人の絶え籠もりては過ぐいたまはむ(どうして若い姫たちが引き籠もって過ごしなされようか)」と、涙ぐみつつ念誦したまふさま(と涙ながらに読経なさる八宮の姿は)、いときよげなり(とても清貧なのでした)。

おとなびたる人びと召し出でて(八宮は年配の女房たちをお呼び出しになって)、

「うしろやすく仕うまつれ(姫たちの今後の世話を頼む)。何ごとも(とにかく)、もとよりかやすく(根が薄っぺらな)、世に聞こえあるまじき際の人(名も無い低い身分の者は)、末の衰へも常のことに(先行きに期待出来ないの)、紛れぬべかめり(寄せ付けるな)。

*かかる際になりぬれば(我が王家であってみれば)、人は何と思はざらめど(他人は何とも思わないだろうが)、口惜しうてさすらへむ(情け無く流浪するのは)、契りかたじけなく(先祖に申し訳なく)、いとほしきことなむ、多かるべき(残念に過ぎる)。 *「かかる際になりぬれば」は注に<宮家の家柄。>とある。王族の誇りを此処まで明言するとは思わなかったの、ちょっと新鮮に思えたほどだ。

もの寂しく心細き世を経るは(孤独で貧しく暮らすのは)、例のことなり(普通のことだ)。生まれたる家のほど(生まれた家なりの)、おきてのままにもてなしたらむなむ(仕来たり通りにお暮らしなさるのが)、聞き耳にも(世間への聞こえも)、わが心地にも(自分の気持ちとしても)、過ちなくはおぼゆべき(安心出来るものと思えます)。 *この八宮の説は印象的だ。最近の世間の風潮はマスコミ、特にテレビの影響が大きく、マスは問題を社会化することに自己の存在意義があるので、孤独死を、さも社会制度上の問題であるかのように取り上げるが、また実際に、ある個人が死に至る事態の背景に何らかの犯罪行為が関わっている場合はあるだろうし、そして後片付けを初め、人の死は他者に影響を及ぼす面がある事も事実だが、個人が静かに自分の価値観に沿って眠る尊厳は他者の踏み入れを本質的に許さない。その限りでは、他人が何を言っても本人が聞かなければ良いだけの事なので、マスコミの喧伝も勝手にすれば良いようなもんだが、その本質を踏みにじる風潮が如何にも耳障りなこと、この上ない。

*にぎははしく*人数めかむと思ふとも(華やかに目立とうと思っても)、その心にもかなふまじき世とならば(そうも行かない事情なら)、ゆめゆめ軽々しく(決して軽々しく)、よからぬ方にもてなしきこゆな(変な男を取り次ぎ申すな) *「にぎははしく」は<賑やかに>だが、この形容詞は如何にも藤原氏を思わせる言い方だ。当時の宮廷読者なら、これが誰の事を言っているのか、実際に具体的に分かったことだろう。 *「ひとかずつめく」は<人並みに>という言い方だろうが、この「人」は世間一般の<人>ではない。一角の<人=有名人>だ。

などのたまふ(などを仰います)。

まだ暁に出でたまふとても(八宮はまだ夜明け前に出発なさるといふ時に)、こなたに渡りたまひて(姫君の御部屋にお見えになって)、

「*無からむほど、心細くな思しわびそ(留守中は心細く思いなさいますな)。 *「無からむほど」は注にく以下「思し入れそ」まで、八宮の姫君たちへの詞。「無からむほど」は留守中の意だが、暗に死後のこと(「亡からむのち」)も含めて言っている響きがある。>とある。確かに、「無からむ」も「亡からむ」も「なからむ」だし、「な」音の注意喚起を示す抽象概念意は英語にも通じるから、こういう語法は世に多いのかも知れない。

*心ばかりはやりて遊びなどはしたまへ(気持だけは明るく持って楽器演奏などをなさっているなさい)。 *「心ばかりはやりて」は訳注にく気持だけは明るく持って。>とある。確かに、現代語にはく気ばかり急いで(仕事が手に付かない)>という成句めいた言い回しがあるので、どうしてもその意に引かれ気味だ。此処の「はやる」は「逸る」ではなく「榮やる」らしい。ただ、「は」音の高揚感は共通するのだろう。

何ごとも思ふにえかなふまじき世を*思し入れそ(どうせ思うようにならない世の中なのだからあまり考え込んでも仕方ないでしょう)」 *「思ひ入る」はく考え込む>と古語辞典にある。「そ」は制止の終助詞とのこと。禁止の終助詞「な」よりも、「そ」の方が柔らかい言い方、のような説明もある。また、「そ」は多くは「な～そ」の形で用いられる、ともある。雑感だが、おそらく「な」も「そ」も、それ自体は強調意の係助詞で、使用者の強い論理性や説得意によって禁止や制止の語用になったもの、のように語感される。「な」は強い禁止というより、事物叙述に於ける物性として「(な)あらじ」という論理性によって断定されるのであり、「そ」は「(そ)あたはじ」という価値判断によって意見される、という論旨の違い、かと思う。

など(など仰っては)、振り返がちにて出でたまひぬ(振り向きがちにお出掛けなさいました)。

二所(姫君のお二人は)、いとど心細くもの思ひ続けられて(父宮がいらっしゃらなくなると、いっそう心細く思い沈み続けられて)、起き臥しうち語らひつつ(一日中話し合っては)、

「一人一人*なからましかば(一人一人になってしまったら)、いかで明かし暮らさまし(どう暮らせば良いのでしょうか)」 *「なし」はく死>を言う語用ではなくく同居して居ない=別々になって居る>という言い方なのだろう。薫君や匂宮を意識しての発言だろうが、妙に分かり難い。

「今(でもこれからは)、行く末も定めなき世にて(先の事は分からないので)、もし別れるやうもあらば(もし別れるようなことにでもなったら)」

など、*泣きみ笑ひみ(などと泣いたり笑ったり)、戯れごともまめごとも(ふざけ合うのも親身な話も)、同じ心に慰め交して過ぐしたまふ(同じ気持で慰め合って過ごしなさいます)。 *「泣きみ笑ひみ」と如何にも若い娘らしい快活な様子を表わすことで、いっそう山里の侘しさを際立たせている、のだろうか。しかし、姫君たちの台詞に薫君や匂宮を意識している娘心を読ませるのは、あまりに読者に委ねられ過ぎていて、今ひとつ舌足らずの印象だ。

[第五段 八月二十日、八の宮、山寺で死去]

かの行ひたまふ三昧(八宮が勤行なさる山寺での念仏三昧が)、今日果てぬらむと(今日終わったろうと)、いつしかと待ちこえたまふ夕暮に(お帰りが何時なのかと姫君たちがお待ち申しなさっている夕暮れに)、人参りて(使いの人が山荘に参って)、

「今朝より、悩ましくてなむ、え参らぬ(今朝から体調が悪く帰れません)。風邪かどて、とかくつくろふものするほどになむ(風邪だろうとあれこれ養生しています)。さるは(折角)、例よりも対面*心もとなきを(久しぶりの対面が楽しみなのに)」 *「こころもとなし」は気が気では無い状態だろうが、此处では<不安だ>ではなく<楽しみだ>だろう。

と聞こえたまへり(とお手紙がありました)。

胸つぶれて、いかなるにかと思し嘆き(姫君たちは驚いてどうしたことかと心配なさって)、御衣ども綿厚くて(何枚もの御衣服の綿を厚く入れたものを)、急ぎせさせたまひて(女房たちに急ぎ用意させ為さって)、*たてまつれなどしたまふ(届けさせる手配などをなさいます)。 *「たてまつれ」は、「など」という上文の叙述を一まとめの事物と捉えて類型化する思考を示す助詞が受けているので、連用名詞だろうが、「奉る」の連用形は「奉り」なので、是は別の語らしい。「奉れ」に付いては、古語辞典の解説にも定説はないとのことだが、諸説例示の中に使役の<「奉らせ」の約>という解釈もあるそうで、此处ではその語意で文意が通るかと思う。ただ、「奉る」の語意が<お届け申し上げる>のか<お着せ申し上げる>のかが分からないが、私に分かり易いのは<お届け申し上げる>の方だ。

二、三日怠りたまはず(八宮は二日、三日と持ち直しなさらず)。「いかに、いかに(どういう具合でしょうか)」と、人たてまつりたまへど(と姫君が見舞の使者を差し向けなさると)、

「ことにおどろおどろしくはあらず(特にひどくはありません)。そこはかたなく苦しうなむ(どことなく優れません)。すこしもよろしくならば(少しでも良くなったら)、*今、念じて(直ぐに、不調を圧してでも、帰るつもりです)」 *「今、念じて」は注に<『集成』は「近いうちに、無理をしてでも(帰りましょう)。「念ず」は、我慢する」。『完訳』は「すぐにでも、がまんしてでも。希望的観測による言葉」「じきに、我慢してでも下山しよう」と注す。>とある。

など、*言葉にて聞こえたまふ(などを八宮は使者に口上でお応えなさいます)。 *「ことばにて」は注に<『集成』は「使者の口上で。筆を執る力もないのであろう」と注す。>とある。

阿闍梨つとさぶらひて仕うまつりける(阿闍梨がずっと付き添って看病していました)。

「はかなき御悩みと見ゆれど(ひどくお苦しみではいらっしゃらないので、ちょっとした御不調のようにも見受けられますが)、*限りのたびにもおはしますらむ(自力がひどく衰えていらっしゃるので、御覚悟なさるべきでしょう)。 *「限りのたびにもおはしますらむ」は、可能推量の助動詞「らむ」を使った<かもしれません>という言い方だが、客観判断はともかくも、本人に死の可能性は軽々に口に出来ないで、口にするときは決定的な事態であり、婉曲に言う<終わりではいらっしゃるでしょう>は<覚悟して下さい>だ。痛み苦しむ症状では無いが、その衰弱は、本人にも死が察せられるほどに、激しかったのだろう。

君たちの御こと(姫君たちのことは)、*何か思し嘆くべき(悲しみなさることはありません)。人は皆、御宿世といふもの異々なれば(人は皆それぞれに御宿命というものが別々に決まっているので)、御心にかかるべきにもおはしまさず(宮様が御考えになってもどうなるものでもございませぬ)」 *「何か」は注に<反語表現。『集成』は「八の宮の妄執をさまそうとする仏者としての配慮」と注す。>とある。

と(と阿闍梨は八宮に)、いよいよ思し離るべきことを聞こえ知らせつつ(いよいよ諦めを付けなさるべき事をお知らせ申しては)、「今さらにな出でたまひそ(今さらは未練なので寺を出なさいませぬ)」と、諫め申すなりけり(と制し申すのでした)。

八月二十日の*ほどなりけり(八月二十日の事なのでした)。 *「ほど」は現代語では<大体それくらいの期間、頃、時分>という幅の有る言い方だが、元々は、事物を何らかの基準によって順序立てた体系概念に於いての対象体の位置(=単位)を示す語、だった。とするなら、この「ほど」は<日付>そのもののことであり、現代語で言う<日の事なのでした>という言い方が、平安当時は「ほどなりけり」だった、という考え方も成立する。で、現代語では事物ごとの体系それぞれに、例えば「日付」とか「温度」とか「階級」とかの個別単位名称が発達したので、「ほど」は<位置概念自体=程度>を示す語になって<程度=くらい>というおよその目安を意味するようになった、と思えば辻褄も付く。

おほかたの空のけしきもいとどしきころ(このところの天気が荒れ模様の中で)、君たちは、朝夕、霧の晴るる間もなく(姫君たちは一日中先行きが見通せないまま)、思し嘆きつつ眺めたまふ(不安な気持で様子を眺めていらっしやいます)。有明の月のいとほやかにさし出でて(有明の月がとても明るく差し出でて)、*水の面もさやかに澄みたるを(宇治川の水面も静かに納まっている時に)、*そなたの薨上げさせて(南表の薨戸を開け上げさせて)、見出だしたまへるに(雲行きを御覧になると)、鐘の声かすかに響きて(山寺の鐘の音が遠く聞こえて)、「明けぬなり(明け時です)」と聞こゆるほどに(と知らせる内に)、人びと来て(使者の人々が来て)、 *「みづのおももさやかにすみたる」は嵐の前の静けさ。 *「そなたのしとみ」は南庭に面した薨戸。二十一日の有明の月は暁時分に南中する。また、宇治川北岸にあるこの山荘から見て、川は南側。

「この夜中ばかりになむ、亡せたまひぬる(この夜半ほどに亡くなりました)」と泣く泣く申す(と泣く泣く申します)。

心にかけて(姫君たちは気が気でなしに)、いかにとは絶えず思ひきこえたまへれど(父宮のご病状をどうだろうかとは絶えず案じ申しなさっていたが)、うち聞きたまふには(実際の訃報に際しては)、あさましくものおぼえぬ心地して(驚いて何も考えられない気分)、いとどかかることには(悲しみのあまり)、涙もいづちか去にけむ(涙も何処かへ忘れたか)、ただうつぶし臥したまへり(ただうな垂れて伏せてなっぺいらっしやいました)。

いみじき目も(非情な死別も)、見る目の前にて*おぼつかなからぬこそ(看病する目の前で本人が意識が無くなるのを見届けてこそ)、常のことなれ(世の常としてその死を受け入れられるが)、*おぼつかなさ添ひて(その最期の様子も分からないというのでは)、思し嘆くこと(遺族がその死を受け入れ難いのは)、ことわりなり(当然です)。 *「おぼつかなからぬ」は、此処では「ことわりなり」

という一般論としての論理展開の構文なので個人への敬語遣いは無く、病人本人が<覚束無くなってしまうこと＝死んでしまうこと>。だから、「常のこと」は<人の死は世の常のこと>で、「こそ～なれ」という論理認識構文は<～とのように納得出来る>という文意を示す。 *「おぼつかなさ添ひて」の「覚束無し」は遺族の戸惑い。

しばしにても(少しの間でさえ)、後れたてまつりて(父宮に先立たれ申しては)、世にあるべきものと思しならばぬ御心地どもにて(生きて行けると思っていたらなかつた御二人同士なので)、いかでかは後れじと泣き沈みたまへど(直ぐに後を追いたいと泣いて落胆なされたが)、限りある道なりければ(人それぞれに定まった天命のあることなので)、何のかひなし(どうにもなりません)。

[第六段 阿闍梨による法事と薫の弔問]

阿闍梨、年ごろ契りおきたまひけるままに、後の御こともよろづに仕うまつる(この山寺の阿闍梨が年来八宮の約束して置きなされた通りに御葬儀一切を勤め申し上げます)。

「亡き人になりたまへらむ御さま容貌をだに(故人にお成りの父宮の御顔だけでも)、今一度見たてまつらむ(今一度拝し申したい)」

と思しのたまへど(と姫君は思い仰るが)、

「今さらに、*なでふさることかはべるべき(今さらどうしてそのような必要がありましょうか)。*「なでふ」は<「何といふ」の約。>と古語辞典にある。何といふ=どういうわけで=何で、と意味も取り易い。「な・じょ・う」と「な・ん・で」の違いは発音の硬軟でしかないように見えるが、柔らかい音節は明瞭さに欠けるので公用は避けられたのかも知れない。

日ごろも(この数日も)、また会ひたまふまじきことを聞こえ知らせつれば(未練となるので、もうお会いなさるべきではない事をお知らせ申して来ましたので)、今はまして、かたみに御心とどめたまふまじき*御心遣ひを(今はまして互いに執心なさるまじき仏道の御心得を)、ならひたまふべきなり(お知りなさるべきです)」 *「みこころづかひ」の「御」は宮と姫に対しての尊称なのだろうが、「心」は<仏道心>のようだ。ただ、この阿闍梨の見解は作者の認識とは違うようだ。先に、地文語りで「いみじき目も、見る目の前にておぼつかなからぬこそ、常のことなれ、おぼつかなさ添ひて、思し嘆くこと、ことわりなり」(五段)とあった。私も作者に同感する。死別を惜しみ悲しむことと、人の死を自然の摂理と認知することとは別の事柄であり、矛盾しない。むしろ、エネルギー消費反応を終えた個体を実際に見て確認することで、縁者は故人の存在や想念に一定の判断が下せて、事物に区切りを付けて気持を整理できるのであり、確認無しに推量だけで先に進む他人の困難に気が回らないのは、実にお粗末な対応かと思う。まして、阿闍梨自身は八宮を看取って、自分だけは確認作業を済ませている、という身勝手振りだ。

とのみ聞こゆ(とだけ阿闍梨は申します)。おはしましける御ありさまを聞きたまふにも(八宮がご臨終なさるまでの御様子を姫君たちがお尋ね申しなさっても)、阿闍梨の*あまりさかしき聖心を(悟り済ました立派な御最期などという、阿闍梨のあまりに經典本意の仏道心を)、憎くつらしとなむ思しける(不本意で辛いものとお思いなのでした)。 *「あまりさかしき聖心」は<あまりに学問めいた經典解釈>みたいなことだろうか。この言い方自体が抽象的な上に、問答場面の具体描写がない。だから

多分、阿闍梨も具体的な説明をせずに、まして宮が姫に別れを惜しんでいたなどは絶対に言わずに、執心無く物に動じない立派な最期だった、みたいなことしか言わなかったのだろう。注にはく『完訳』は「俗事を顧みない仏道一筋の冷静な心。俗人には非情とも見える」と注す。物語作者の立場も姫君方に同情的で、こうした仏教者に対しては批判的か。>とある。仏道に関しては私は何も知らないが、学問や学識一般で考えてみれば、学者が無学な生活者よりも本質を知らない、みたいなことだ。悲しいことに、こういうことは実際に多くある。ただ、学者の方が学問に詳しい事自体は事実なのだろう。そうでなければ、学者として認められる事自体無いからだ。では何が変なのか。つまり、解決すべき困難は、学者の上だけにあってはならず、誰の上にもあって、誰もが社会生活の場面に応じて、それなりに対応しているものであり、学者にはその本質的な解決が期待されているにも関わらず、専門的な隘路にこだわって、一般人の対応にすら及ばず、稚拙な対応に終止する、みたいなことだ。大罪だ。

入道の御本意は(八宮の仏道入信の御本意は)、昔より深くおはせしかど(昔から深くていらっしやったが)、かう見譲る人なき御ことどもの見捨てがたきを(このように他人に任せられない姫君たちの御世話を)、生ける限りは明け暮れえ避らず見たてまつるを(生きている限りは毎日お側で見守り申すのを)、*よに心細き世の慰めにも思し(非常に心細い日々の暮らしの慰めにもお思いになって)、離れがたくて過ぐいたまへるを(八宮は出家を思い切れずに山荘で過ごしていらっしやったが)、限りある道には(天命の前には)、*先だちたまふも慕ひたまふ御心も(先立たちなさる宮の憂慮も慕いなさる姫君たちの依頼心も)、かなはぬわざなりけり(通じないのでした)。*「よに」は「世にも」と同じでく世間にくらべるものがないほど、程度がはなはだしいさま。非常に。>と大辞林にある。「世に心細き世の慰めにも」は戯れ言を意図しないなら、バタついた紛らわしい言い方に聞こえる。*「先だちたまふも慕ひたまふ御心も」は注にく『集成』は「お先立ちになるご心配もおあとを追いたいお気持も」。『完訳』は「先立たれる宮のお気持も、あとに残って恋い慕う姫君たちのお気持も」と訳す。>とある。確かに、どうも他の文意は見えて来ない。が、だとすると、この文は全体に何が言いたいのか分からない。既に言い尽くされたことの繰り返し、にしか私には聞こえて来ない。が、あえて此处で繰り返すことで、冷たいようでも阿闍梨の言う事は理に適っている、と念押しする地文なのだろうか。しかし、天命には抗えない、というのは、何も仏道に示された真理でもなく、誰もが普通に認知していることだ。そして、例えどんな小さな一部分であっても、普通に現実社会に責任を持つ立場で生きている人は某かの執着があって当然だ。執着に捉われても、果たせない物は果たせない、という認識も仏道の専売特許じゃないだろう。苦しんでいる人を救う方便を考案する価値を否定するものではないが、方便が先走って、実際の苦しみが救われないんじゃ、タハゴトだ。

中納言殿には(薫の中納言殿におかれては)、聞きたまひて(八宮の訃報をお聞きになって)、いとあへなく口惜しく(まことにあっけなく残念で)、今一度、心のどかにて聞こゆべかりけること多う残りたる心地して(もう一度、ゆっくりとお話し申したい事が多く残っている気がして)、おほかた世のありさま思ひ続けられて(およその事態の推移が次々と具体的に想像出来て)、いみじう泣いたまふ(非常にお泣きなさいます)。

「またあひ見ること難くや(再び会うのは難しいかも知れない)」などのたまひしを(など八宮が仰っていたのを)、なほ常の御心にも(普段からのお考えにも)、*朝夕の隔て知らぬ世のはかなさを(何時どうなるとも知れぬ世のはかなさを)、人よりけに思ひたまへりしかば(誰よりも強く思い仰っていらっしやったので)、耳馴れて(却って聞き慣れていて)、昨日今日と思はざりけるを(死別の日を昨日今日とは思っていなかったのが)、かへすがへす飽かず悲しく思さる(中納言殿は返す返す残念で悲しくお思いになります)。*「あさゆふのへだて」は注にく『集成』は「朝に紅顔有

つて世路に誇れども、暮には白骨と為つて郊原に朽ちぬ」(和漢朗詠集、無常、藤原義孝)を指摘。>とある。「明日をも知れぬ命」どころか<今日でさえ如何なるか分からない>みたい。

阿闍梨のもとにも(阿闍梨のもとへの布施も)、君たちの御弔らひも(姫君たちへの弔意も)、こまやかに聞こえたまふ(中納言殿は手厚く見舞品をお贈り申しなさいます)。かかる御弔らひなど(このような御弔問などを)、また訪れきこゆる人だになき御ありさまなるは(他に訪れ申す人さえない山荘の孤立振りからは)、ものおぼえぬ御心地どもにも(世間知らずの姫君たちにも)、年ごろの*御心ばへのあはれなめりしなどをも(年来の中納言殿の八宮に共感なさっていた御心向きが真剣だったらしいことなども)、思ひ知りたまふ(お分かりなさいます)。*「みこころばへ」は注に<薫は故八宮の法の友として三年間の交誼がある。「なめりし」は姫君の目を通しての叙述。>とある。が、交誼は客観認識であり、「こころばへ」は当人の<意向、意図、心向き>だろうから、薫君が山荘へ通う動機ならく八宮への共感>なのだろう。

「世の常のほどの別れだに(良く有り勝ちな片親との死別でさえ)、さしあたりては(直面すれば)、またたぐひなきやうにのみ(比類無きもののように)、皆人の思ひ惑ふものなめるを(誰もが悲嘆するものだろうに)、慰むかたなげなる御身どもにて(頼みの父宮に先立たれて、慰めようもない身の上の姫君たちであってみれば)、いかやうなる心地どもしたまふらむ(どのような心境でいらっしゃるやら)」と思しやりつつ(と中納言殿は思い遣りなさりつつ)、後の御わざなど(宮の追善法要など)、あるべきことども、推し量りて(行われる筈の供養を推し量って)、阿闍梨にも訪らひたまふ(阿闍梨にも物資支給をなさいます)。ここにも(山荘の方にも)、老い人どもにことよせて(古女房たちに申し付けて)、*御誦経などのことも思ひやりたまふ(姫君たちから阿闍梨に読経供養を依頼申しなさるよう差向けることなども配慮なさいます)。*「みずきやう」は遺族たる姫君たちから読経僧に依頼する法要、なのだろう。阿闍梨は基本的には、弟子への追善供養として自ら法要を営む姿勢を示しているようだが、それでも、遺族としても供養の姿勢は示すものなのだろう。